



第65回 地域医療勉強会

皮膚・排泄ケア特定認定看護師 石飛 仁美



8月7日・8日、第65回地域医療勉強会を開催しました。今回は『皮膚をみる』というタイトルで皮膚・排泄ケア特定認定看護師の石飛仁美看護師長に講義をしてもらいました。講義の内容は、まず皮膚を目でみて（視診）、耳できいて（問診）、手でふれる（触診）が基本的なフィジカルアセスメントになると話されました。“ケアに関する視点ではなく、とにかく皮膚をみてほしい”という講師の思いから『観察』にフォーカスを当てた内容でした。後半は皮膚の損傷を見る時の、さまざまなスケールを活用して評価する方法について説明されました。『DESING-R 2020』『STAR分類』のカードを参加者に配布され、事業所内で共通した評価をすることが理想的であるため、“ぜひ在宅で過ごされている方にも活用してもらいたい”と話されました。参加者のアンケートでは「皮膚の観察をしっかりと行い、要因分析をしていくことが対応を考えるヒントとなった」「事例を用いながら評価方法を学べてわかりやすく納得しながら考えることができた」等のご感想をいただきました。今回の学びを現場で生かしていただければと思います。たくさんのご参加をいただきましてありがとうございました。次回は11月13日・14日開催予定です。

れんけい だより



第21回 地域連携交流会に参加して



副院長
城田 欣也



医療技術部 第一臨床工学課
課長
福田 勇司

令和6年8月1日にホテル一畑にて第21回松江赤十字病院地域連携交流会が松江市医師会との共催で開催され、院外より58名、院内からは医師43名を含む58名と多数のご参加をいただきました。冒頭に行われた大居院長からの挨拶で、当院で本年内にロボット手術が導入予定となった事が発表されました。研修会では当院呼吸器外科の三和健部長より当院での肺癌に対する低侵襲鏡視下手術、チーム医療、AI診断とロボット手術などの最新医療に関する講演がありました。松江市医師会からは吉野季三先生より松江市休日診療室の歴史と現状について、細田眞司医師会長より松江市医師会の活動に関するお話がありました。休日診療室運営・維持に関する多大なご苦労と努力、松江市医師会の幅広い活動内容をお聞きし、医師会の先生方への尊敬と感謝の念を抱かざるを得ませんでした。

研修会に続き、数年ぶりに懇親会が行われました。吉川浩郎松江市歯科医師会会長の乾杯挨拶に始まり、久しぶりに多くの先生方と直接お話しする機会を得、大変充実した懇親会でありました。

今回の交流会を通じて、改めて地域の医療体制の重要性を感じました。病院と診療所が連携し、協力することは、患者さんにとって最善の医療を提供するための不可欠な要素であり、これからもしっかりと手を携え、地域医療のさらなる発展を目指していく所存でございます。

令和6年8月1日にホテル一畑にて開催されました第21回松江赤十字病院地域連携交流会に参加させて頂きました。

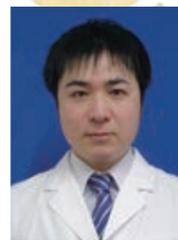
第一部の研修会では、当院の三和呼吸器外科部長より『呼吸器外科診療の現状』と題し、胸腔鏡下手術の手法から今年度導入予定のロボット手術についてわかりやすく講演して頂きました。松江医師会より吉野休日診療委員長より『休日救急診察室の診察状況について』と題し講演して頂きました。最後に細田松江医師会会長より松江医師会の活動紹介をして頂きました。参加者の方々からご講演内容に対してご質問などがあり有意義な情報共有の場となっていました。

第二部は、数年ぶりの対面式での懇親会でした。会話されている方々が、素敵な笑顔でお話している様子を拝見すると顔の見える関係性の大切さを改めて感じる時間でした。また、松江圏域の医療を支えてくださっている方々がこれほど数多く居られること、医療人としての使命感をもって対応されていることを肌で感じる事ができ胸が熱くなる思いでした。

松江赤十字病院の職員として島根県の医療支援に貢献したいと改めて思いました。

これからも、このような交流会を通じて医療を支える皆様方との絆を深め目の前の診療に全力で向き合いたいと思います。私自身が皆さんに元気をもらった交流会でした。

新任医師紹介



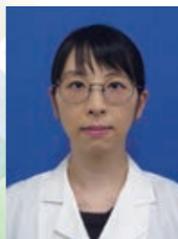
泌尿器科 10/1 付
さかもと のりお
坂本 憲生

令和6年10月より勤務させていただきます。専門は泌尿器科領域です。お気軽にご相談ください。皆様のお役に立てるよう努力いたしますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



第二小児科 10/1 付
なかむら みく
中村 実来

10月から松江赤十字病院小児科に赴任しました中村と申します。地域の子ども達やご家族のお力になれるよう尽力して参ります。よろしくお願いいたします。



第二小児科 10/1 付
かわの さきこ
川野 早紀子

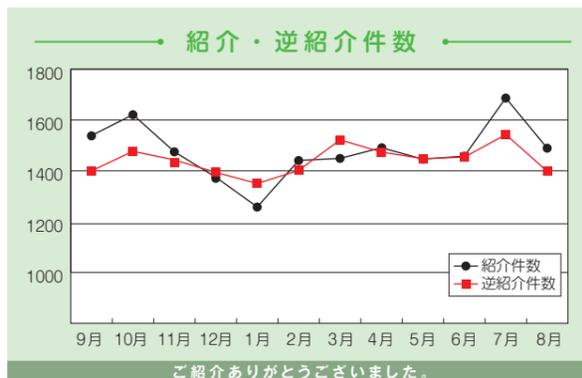
10月より勤務させて頂くこととなりました。出身は福岡で松江での勤務は初めてですが、地域の子ども達のために少しでもお役に立てればと思っています。若輩者ではございますが何卒お力添えの程よろしくお願いいたします。

退職者

●令和6年9月30日付

- 泌尿器科副部長 弓岡 徹也
- 第二小児科 真玉 千紘
- 第二小児科 石本 千夏

お世話になりました



松江赤十字病院 地域医療連携課

〒690-8506 松江市母衣町200番地
TEL 0852-32-7813 FAX 0852-27-9261



第7回 雲南圏域地域医療従事者 スキルアップセミナー



腎臓内科部長
花田 健

慢性腎臓病（CKD：Chronic Kidney Disease）患者は高齢化や食の欧米化に伴い増加を続け、2005年の推計で約1330万人（成人8人に1人）でしたが、2024年には約2000万人（成人5人に1人）とも言われています。そして腎炎中心であったCKDの原疾患は糖尿病・高血圧など生活習慣病が中心となり、病診連携・多職種連携などを通じて多数の医療従事者が関わるのが重要となりました。このような背景から多職種が患者へCKD対策指導できるためのスキルアップを目的として看護師・保健師、管理栄養士、薬剤師を対象に腎臓病療養指導士制度が2018年に発足されました。当院でのCKD対策の取り組みの一つとして6名の医療従事者が腎臓病療養指導士を取得しました。CKDの普及・啓蒙活動として2024年5月には院内の医療従事者を対象に、腎臓病療養指導士を中心としたCKD多職種セミナーを開催し50名以上の参加がありました。次なる普及・啓蒙活動を検討していた頃に本セミナーのお誘いがあり実現に至りました。講演は医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、理学療法士から構成し、それぞれの特性を生かした内容としたつもりです。幸いにも100名に近い多数の方に御参加いただき、今後の取り組みの励みとなり大変感謝しております。今後とも当院の取り組みへ御参画いただきますようお願いいたします。



腎臓病療養指導士
森脇 敦子

CKDの看護として、今回はCKD、AKI(急性腎障害)について、CKDステージに応じた支援、尿毒症症状と観察のポイント、腎機能を悪化させないための看護について話をさせていただきました。CKDは症状がほとんどなく進行し、自覚症状が現れたときには、かなり進行している状態になる病気です。健診などで発見されても、自覚症状がないため放置されやすいですが、早期から予防、管理をすることで病気の進行を緩やかにすることができます。まずはCKDについて知ってもらうことが大切です。ステージに応じて、現在の状態を把握してもらい、生活習慣や食事内容の見直しができるよう情報提供を行い、治療が継続していけるよう介入をしていきます。また、患者本人だけでなく家族にも協力を得ながら、医師、管理栄養士、薬剤師、セラピストなど多職種との連携も必要です。看護師は、患者の思いを傾聴し、患者、家族との信頼関係を構築していくことも大切です。そして、患者が意思決定できるまで気持ちに寄り添い、丁寧に説明し管理が継続できるよう支援をしていく必要があります。

今後も地域との連携を強化しながら、患者さんの腎臓が守っていけるよう活動をしていきたいと思っています。



腎臓病病態栄養専門管理栄養士
栄養課長補佐
安原 みずほ

食事療法の目的は、CKDの進行抑制です。CKDステージにより、たんぱく質、食塩、カリウムを制限す

ることがよく知られていますが、病態は多様で、個別の栄養設定が大切です。今回の講演では、エビデンスに基づくCKD診療ガイドライン2023より、たんぱく質制限時のエネルギー確保の重要性、サルコペニアなどではたんぱく質制限を緩和する場合があること、また、果物や野菜を多く含む健康的な食事と死亡率の低下との関連、果物や野菜の代謝性アシドーシス改善効果の期待などを紹介しました。不必要なたんぱく質制限をしない、カリウムに関して画一的な果物や野菜の制限をしないことが大切であると伝えました。これら食事療法を含めたCKD診療には管理栄養士の介入が推奨されており、是非連携させてもらいたいと思っています。雲南圏域は高齢者も多く、CKD指導対象も多いようです。講演中にも紹介しましたが、腎臓病療養指導士の資格取得をおすすめします。講演後の質疑応答では、腎臓病療養指導士の取得条件について質問がありました。終了後には対象職種の方から詳細について質問がありました。一緒に地域内でのCKD対策に取り組みたいです。これからもよろしくお願ひします。



薬剤部 薬品情報係長
柴田 智恵

「CKDと薬物療法」についてお話しさせて頂く機会をいただきました。

CKDに対する薬物療法の目的は、腎機能の低下を遅らせて末期腎不全にならないようにすることと、心血管疾患の新規発症や伸展を阻止することです。近年、CKDの進行を遅らせる薬としてSGLT-2阻害薬やMR拮抗薬、降圧薬はRAS阻害薬に加えてARNIなどが広く使われるようになりました。CKDの進行に伴う症状に対して使われる薬についても種類が多く、薬剤毎に特徴や注意事項が異なります。それぞれの薬剤をよく理解し、上手に使うことが疾患管理上とても重要です。

また、CKD診療ガイドライン2023では、初めてシックデイについて記載されました。高齢者やCKD患者さんは急性腎障害のリスクが高く薬剤性の急性腎障害を合併しやすい事が知られています。特に体調不良時には普段問題が無かった薬剤でも急性腎障害などの副作用を来す場合があります。このため、シックデイの

症状と適切なタイミングで「かかりつけ医に相談すること」、著しい体調不良時には「速やかに医療機関を受診すること」を日頃から患者さんに説明しておくことが大切です。

今後もCKD患者さんに有効で安全な薬物療法を提供できるよう、多職種連携を進めたいと思います。



第二理学療法課
腎臓リハビリテーション指導士
須山 竜二

フレイル・サルコペニアという言葉はすでに医療者のみならず一般の方にも周知され、その関心の高さが分ります。慢性腎臓病(CKD)を有する患者さんは筋力や身体を動かす機能の低下、筋量の低下を起こすことが多く、サルコペニアになりやすく、再入院や生存状況に影響を与える因子として報告されています。

近年、運動療法や身体活動の増加を行うと透析に至るリスクや死亡率を低下させるという報告がなされ、ひとむかし前まではCKD患者は安静を指導されていましたが、現在は過剰な負担がかからない活動、トレーニングにおいては推奨されるようになりました。

CKDにおいて身体活動や運動療法を専門とする理学療法士や作業療法士が身体活動の維持・改善を目的に介入するケースが増えており、腎臓リハビリテーションの重要性も高くなると考えます。

疾患管理はもちろん、栄養管理、薬剤指導などの対策を講じた上でリハビリテーションの介入を行うことがより効果的にCKD患者のADLやQOLを改善させることができると考えます。

“Exercise is Medicine”という言葉もあるように徐々に運動におけるメリットがCKDなどの慢性疾患患者層にも浸透していくように願っています。

